
30歳以上を信じろ！

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

30歳以上を信じる！

【Nコード】

N3244L

【作者名】

ごはんライス

【あらすじ】

リープの新作長編の宣伝です。面白いからみんな読め。読まんと家燃やす。いやそれは犯罪だからいかな。じゃあ読まなかったら、毎晩、晩飯食いに行く。おかわりたくさんして、お前の家の家計をめちゃくちゃにしたるぞ。わかったか阿呆。レイアウトの色を夜と海のイメージにしてみました。

谷村信一郎。彼は34になるというのに非正規労働者であった。低所得すぎて結婚できない。それどころかアパートを借りることもできず実家に寄生している。情けないことこの上ない。

親父は60歳で退職。65まではアルバイト待遇らしいが収入が半減した。五年後どうなるのであろう。無論、親父は年金生活に入り質素に暮らせば何とかなるだろう。おふくろはすでに年金で暮らしている。しかし、両親が死んだらオレはどうなってしまうのだろうか。国から補助が出るということはない。固定資産税を払うだけでも恐怖。ますますの貧困が予想される。不安で不安でならない。

そんな信一郎の密かな幸せ。それは、ヘリコプターで空を飛ぶことだ。思い切って月賦で買った。非正規労働者の身でヘリコプターは贅沢かもしれない。正直、高かったが、空を飛んでると現実のいやなことをいろいろ忘れられる。

信一郎は塾のバイトが十時に終わった。室長に頼み、ヘリコプターは屋上に止めさせてもらった。室長は「ああ。こないいヘリコプターでデートしたいなあ」と信一郎を上目遣いで見るがもちろんお断りだ。そんなことになれば、室長はメロメロになりラブホテルへ行くという流れになるだろう。自慢ではないがラブホテル代がないのだ。

信一郎は飛び立った。上から街を見下ろす。星のようにきらめく。最高だ。

低空飛行をする。あ。下着泥棒。おっさんと目があつた。わざとそっちに向かつてヘリコプターをぶっ飛ばす。おっさんは驚いて二階から落ちた。あははは。足引きずって逃げとる。パンツ忘れとるぜよ。おもしろ。

とげらげら笑っていたら、被害女性の部屋の窓に向かってヘリコプターが突っ込んだ。

ずがあああああああん。

「うおーやつてもーたー」

部屋に占拠するヘリコプター。テレビやタンスが倒れむちゃくちゃだ。

信一郎はヘリコプターから降りて、部屋を見渡した。幸い、女性はいない。

「やべえなー。見つかったらぜってー怒られる。ヘリコプターも没収だ。どうしよう」

うーむと腕を組んでるうちにドアが開いた。やばい。

「あーっ。なんやこれーっ」

女性は驚いた。そりゃそうだ。

「ちょ、ちよっと。華子ちゃん。これどういうことよ」

「し、知らないよ。うさ子ちゃんの知り合いなの。このヘリコプタ

ー」

信一郎は名刺を差し出した。

「わたくし、こういう者です」

非正規労働者

谷村信一郎

「ふざけんな!」

正社員の華子とうさ子は激怒して、名刺をびりびりに破いた。

「非正規労働者の分際でヘリコプターとは生意気な」

罰としてヘリコプターに乗せなさいと二人に詰め寄られた。

「いや。しかし。ヘリコプターは男の聖域だから。その。あのう」

「低所得のくせに!」

ずきりとした。もう逆らえないと思い、二人を乗せ、バックして窓から飛び出した。

ぐんぐん上昇。

「うわあ。華子ちゃん。楽しいね。あたし、ヘリコプターで初めて」

「あたしも初めて。すごいすごい。家があんなに小さいよ」

信一郎はいまいまして、舌打ちした。女風情をヘリコプターに乗せるとは屈辱的な。

「ねえ。あんた。これどのへんまで行けるの」

「ガソリンいっぱい入れたから行こうと思えばグアムまで行けるよ」

「行こう！行こう！」

「やったね！うさ子ちゃん！」

二人は手をつかみ合ってぴょんぴょん飛んでる。むちゃなやつらめ。仕方ないので港を飛び越し海の上。さすがに海の上は初めてだったので信一郎も不安であった。

しかし、満月だったので、視界が明るくそこは助かった。ただ、月がにやにや笑ってるのがいまましい。

ぶすぶす。まずいガソリンが切れたか。おかしいな。満タンにしたのに。

よく見ると、華子が「フタとれちゃった」と言っ、そこを見ると、穴からガソリンが流れてる。

「こらーーーーっ」

信一郎はあわてて、華子からフタを奪い取り、閉めた。

当然、誰も操縦してない。

「こら信一郎。落ちるよ」

うさ子が叫ぶ。

「あわわわわわ」

海面ギリギリまで下降し、ギリギリのところで持ちこたえ上昇した。

「ふえー最高。ジェットコースターみたい」

「華子のばか！」

「ひつく。ひつく。ごめんなさい。ごめんなさい」

「ばかはお前だ信一郎。三十路にもなって非正規労働者やっとなるお前がばかだ。親が泣いておるぞ」

またずきりときた。小説を年間千枚書いてることなどこいつらに話してもアホだと笑われるだけだろう。無理無理才能ねえもって話で

ある。わかってくれるのは、やはり、オレと同じ歳で会社勤めしながら小説を書いてる友人のリープ（ペンネームです。本名は、金玉もじゃ太郎）くらいのものだ。「小説家になろう」というサイトに張り付けてある「それはなにかとたずねたら」というブログに飛ぶと、「TRUST OVER 30」という新作長編を連載している。毎週金曜日ごろに更新されるらしい。日記に苦労秘話などもやや自嘲気味半分攻撃的なギャグ文体で書かれており、合わせて読むとおもしろい。

長ダイレクトな宣伝だった。作者はこれを作りたかったただけなのだ。リープに味噌田楽をおごってもらったのでやむをえぬ。華子とうさが携帯電話を開き、夢中でリープのトラサーを読んでる。何か知らんが味噌田楽食べてる。なんだこいつら。好き勝手に。自由きままなやつらめ。

そんなことより、早くどこかに着地しないと。月がにやにや笑っている。

お。いい感じで島が見える。ずんずん飛んでくと、これまた都合のいいことに滑走路が見える。

なんと普天間基地！！やつぱりそういう落ちか！！

ぷす。

やばーい。ガソリン切れたーい。

華子とうさ子と信一郎を乗せたヘリコプターは、ものすごいスピードで、基地近くの住宅密集地に向かって落下した。

「わー華ちゃん。おもしろーい」

「こ、怖いよーーうさちゃんーん」

ああん。鳩山ごめん。リープの宣伝を長くやりすぎた。リープのばかああああ。うわああああああああああああ。

つづく（？） 国際問題に発展する予定。うわああああああああ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3244/>

30歳以上を信じろ！

2010年10月10日11時25分発行